

京都府レッドデータブック改訂のための 鳥類標識情報と課題

京都市山科区 須川恒 (すがわひさし)

はじめに

この報文は、データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その5 中間報告3として「京都府レッドデータブック改訂のための鳥類標識情報と課題」について紹介するものである(タイトルが長いとアルラ目次編集者が困るので短くする)。

京都府におけるレッドデータブックの改訂(第2版を改訂し、まず第3版のレッドリストを作成する)を主たる目的に、鳥類標識調査のデータベースを入手して京都府における鳥類標識調査の情報の俯瞰作業を進めている。それらの作業の前史的背景は、須川(2020)に、その具体的構想を、須川・辻本(2020a)に、また中間報告(1・2)を須川・辻本(2020b)および辻本・須川(2020)で紹介した。

京都府レッドリストの鳥類の改訂第3版についてはすでに京都府に報告した(今後公開予定)。各種のレッドリストのランク改訂を検討する際には、中間報告1・2で掲載した情報以外についての標識情報も参照した。

この中間報告3の目的は、レッドリスト改訂の際に標識調査情報をどのように参照したかその情報をまとめて紹介することである。これらの情報をまとめて示すことにより、今後第3版レッドデータブック(2026年出版予定)の原稿作成の際に各種の記載をする際に引用しやすくなる。さらに、標識情報をレッドデータブック改訂に活用する上での課題についても考える。

利用したデータについて

今回利用したデータの使用には山階鳥類研究所の許諾(許可番号:山階保全第31-162号)を得た。許諾を与えていただき、またデータ送付の労をとっていただいたことを感謝する。

改訂作業にどのように標識情報を活用したか

レッドリストの改訂には多くの情報を参照する。基本的には標識情報は補助的な情報となる。しかし、手掛かりが少ない場合は、標識情報がとても参考になる場合もある。

レッドリストの改訂にあたっての理想的な情報としては、一定の調査法で定期的かつ広域的に調査をしている調査結果があることだが、残念なことに京都府にはそのような情報は少ない。背景には近接府県にある自然系博物館が京都府・京都市になく、鳥類を担当する学芸員や研究員もいないことがある。とって、地方版のレッドデータブックを定期的に改訂しようとする京都府の姿勢は貴重なので、できる範囲で関係者は協力している。

改訂を検討する際には、以下のようなさまざまな情報を活用することができた。以下の3)が本報告で扱う内容である。

- 1)京都府鳥類目録 2016.日本野鳥の会京都支部(会員の観察記録のデータベースから各種の年度別・月別に観察記録が示されている)
- 2)府内野鳥観察者へのアンケート(第2版改訂への意見を求めるアンケート)
- 3)京都府鳥類標識調査俯瞰情報(50年弱)
- 4)京都府鳥獣保護区調査まとめ(京都府が日本野鳥の会京都支部に委託)3年間同じ鳥獣保護区を調査している。保護区と隣接する可猟区を併せて調査している。間隔をあけて同じ鳥獣保護区を調査している場合もあり、長期的な変化を知ることができる場合がある。
- 5)桂川調査、宇治サギ類調査報告(京都支部独自調査)。
- 6)京都府ガンカモ類生息調査(毎年1月)府が京都支部へ委託、結果は環境省からウェブ公開されている。
- 7)京都府における毎年の狩猟情報、情報は環境省よりウェブ公開されている。
- 8)モニタリング1000海鳥(冠島・沓島)。毎年の報告は山階鳥研がまとめて環境省よりウェブ公開されている。
- 9)全国鳥類繁殖地分布調査 NPO バードリサーチが結果をまとめて、次々とウェブ公開しており、全国的な観点から多くのヒントが得られる。

得られる情報の特徴はさまざまである。調査範囲が限られていても定期的な調査なのでモニタリング結果としては使える情報がある(4)、5)、6)、8)、9))。広域的に情報を扱っていても調査努力量が年度や地域で異なっている情報をまとめた報告もある(1)、3)、7))。報告としてはまとまっていないが、特定の地域を長年観察している個人やグループからの情報もある(2))。

昨年度(2019年度)は、旧第2版の記載内容を、多くの野鳥観察者にチェックしてもらい、改訂や追加すべき種についての意見を出してもらった。今年度(2020年度)は、それらの種を中心に、上記のデータをもとに関係者で検討を進めた。

まずは、鳥類の地方版レッドデータブックはどのような考え方でできているのかを理解してもらう必要がある。この点については、京都府の鳥類改訂用のウェブサイト(※)も開いて説明をしているので、理解できる人が増えていると思う。

※ <http://larus.c.ooco.jp/KBIRDRDB.htm>

基本的な考えとしては、日本鳥学会会員有志で作成した近畿地区鳥類レッドデータブック(江崎・和田編,2002)に掲載している考えを活かして、多少簡便化した考えで京都府版レッドデータブック第1版の鳥類ができた(京都府,2002)。その考えは2013年の第2版リスト作成や2015年第2版レッドデータブック改訂時や今回も、以下のような同じ内容である。

検討種の選定とランク判定基準

鳥類では、2002年の初版レッドデータブックおよび2013年のレッドリスト改訂にあたっては、ほぼ同じ考えで種選定およびランク判定を行った。

京都府産鳥類リストの中で、多数種、迷行種、情報不足種を除きランク検討種とし、多くの観察者から府内の各種の個体数規模、減少の有無に関する情報を得て、個体数規模と減少の有無を組み合わせで判定した。

鳥類は長距離の渡りをする種が多く、それぞれの種の繁殖個体群、越冬個体群、渡りの時期に中継地に滞在する個体群別に評価して判定し、より厳しい判定をした個体群の結果をもとに種としてのランク判定をした。

各ランクの選定基準は以下のとおりである。

絶滅種 過去に継続的な繁殖や定期的な渡来の記録があるが、現在は継続的な繁殖や定期的な渡来をしていない種(かなり近い個体群はいても断定は難しい)。

絶滅寸前種 (個体群の) 個体数が極めて少なく、大部分の個体群が減少している種。

絶滅危惧種

A: 個体数は極めて少ないが、大部分の個体群が減少してはいない種。

B: 個体数が少なく、大部分の個体群が減少している種。

準絶滅危惧種

A: 個体数は少ないが、大部分の個体群が減少してはいない種。

B：個体数は少なくないが、大部分の個体群が減少している種。

要注目種

繁殖個体数が多く、特に繁殖個体群は減少していないが、島嶼に繁殖するなど限られた営巣地で繁殖する種。

ランク判定のポイント

これらの考えのポイントは、個体群の規模について、極めて少ないか、少ないか、少なくはないかを判断すること、個体群の減少について、減少しているか減少していないを判断することで、規模と減少に関して判断できれば、自動的にどのランクになるか(あるいはランク外か)が判定されることになる。

今回の改訂であらためて思ったことは、上記の **A** と **B** の一般的な時間順である。普通の個体数であった状態から、まず減少がはじまると、少なくはなく減少という準絶滅危惧種 **B** の状態となる。減少が続くと、個体数規模は少なくなるが、減少はしていないという準絶滅種 **A**(年により変動を含む)となる。その次の段階が、個体規模が少なく、かつ減少しはじめる絶滅危惧種 **B** の状態である。それが続くと、個体群規模は極めて少なく、でも減少はしない絶滅危惧種 **A**(年により変動を含む)となる。さらに減少が続くと、絶滅寸前種(極めて少なく、減少)のランクに至る。

希少性の高い種は、観察情報や標識情報など得にくいものなので、個体数が減少しているのか、年変動しているのかははっきりわからないことも多い。

あまりに記録数が少なく、毎年どこに来ると予測できないような種は迷行種として、そもそもレッドデータブックの対象とはしていない。少数ながら繁殖を開始したような種は、その点の情報さえ明瞭ならば、極めて少数の繁殖個体群として絶滅危惧種のランクをつけた種としてデビューしやすい。

旅鳥、または冬鳥として渡来する種の一部が繁殖をしている、あるいは開始している、あるいは繁殖していた種が最近繁殖しなくなったといった場合の検討が必要となる。特に森林性の小鳥類でこのような検討をする際に、奥山や里山で継続的に実施されている鳥類標識調査の情報が役立つ場合がある。

改訂に利用した標識情報

以下にレッドリストの希少ランクについてランクアップまたはランクダウンした種を中心に、標識情報を参照した種について、ともかくそれらの情報を紹介

することにするのでご覧いただきたい。長期の標識情報を俯瞰する際に入り口として便利な10年間別・月別の表を紹介する。

各種の種名の前に、ランクアップ種は★★、ランクダウン種は★、ランク変更がなかった種は☆と、配列順番号を()の中に示した。

☆(58)オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* 要注目種(変更なし)

表1-1 京都府における10年間別・月別の標識情報数：オオミズナギドリ(須川・辻本(2020)表7-8)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79				1696	12136	1766	390	19866	878	4010	308		41050
1980-89					9124	3684		10971	2905	3811	386	1	30882
1990-99			1	1245	2080	3875		6260		287	1006		14754
2000-09					4498	934	1	5701	268	2	162	1	11567
2010-19					3940			4291	4		50		8285
計			1	2941	31778	10259	391	47089	4055	8110	1912	2	106538

オオミズナギドリの個体数は多く、でも繁殖地は冠島と沓島と限られていることから第2版と同じく要注目種となった。しかし、近年のモニタリン1000海鳥の調査や、冠島調査研究会の巣穴数調査でも減少傾向は明らかになっている。10年間隔の合計値は、1970-79年41050羽、1980-89年30882羽、1990-99年14754羽、2000-09年11567羽、2010-19年8285羽となっていて、減少傾向は明瞭であるが、調査努力量にあたる数値(例えば夜・人単位)を出すのが課題と思う。

★★(72)ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* 夏鳥 絶滅危惧種(少減)→絶滅寸前種(極少・減)

かつては宇治川のヨシ原に夏期は少なからず渡来し繁殖も確認されていた。しかし観察情報が激減して府内の他の地域からの情報もなくなっている。宇治川河川敷の規模の大きいヨシ原で継続的な標識調査が行われているが、標識されたのは1979年9月の1羽のみであり、調査時の目撃例もほとんどなくなっている。

★★(115)シロチドリ *Charadrius alexandrinus* 冬鳥・旅鳥だが一部繁殖。2015年時点で繁殖個体群の減少が指摘されていて絶滅危惧種(少・減)となっていた。その後北部海岸や木津川河川敷における繁殖情報がほとんどなくなったため、繁殖個体群からみて絶滅寸前種(極少・減)となった。

表 1-2 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：シロチドリ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89			3										3
1990-99				1	18	27	4						50
2000-09					2								2
2010-19													
計			3	1	20	27	4						55

京都府の標識情報としては、1980～99 年代に木津川のヒナへの標識。2000 年代(2003 年)に成鳥 2 羽(雌雄)に標識されている。これらの調査地がその後どうなったかを把握したい。

★★(174)コアジサシ *Sterna albifrons* 夏鳥 木津川の繁殖個体群から見て絶滅危惧種(極少・普)だったが、ここ 20 年ほど木津川における繁殖情報はほとんどない(2020 年 6 月小規模の営巣開始あるも洪水で成功せず)ので、絶滅寸前種(極少・減)となった。

京都府におけるコアジサシの標識情報は、1990～99 年代に 129 羽、2000 年代に 1 羽が標識されている(ヒナと幼鳥が 105 羽、成鳥が 25 羽)。これらの調査地(河川敷・干拓地)がその後どうなったのかを把握したい。

表 1-3 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：コアジサシ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89													
1990-99					19	83	27						129
2000-09						1							1
2010-19													
計					19	84	27						130

☆(204)コノハズク *Otus sunia* 絶滅寸前種(変更なし)

奥山の規模の大きい自然林に夏鳥として渡来して極めて少数が繁殖していて、減少傾向にあるので第 2 版と同じく絶滅寸前種のままとなった。標識情報は以下で、2000～09 年が 25 羽から 2010～19 年は 6 羽と減少している。

表 1-4 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：コノハズク(須川・辻本 (2020)表 7-1)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89									1				1
1990-99				1									1
2000-09					6		2	3	13	1			25
2010-19					3			2		1			6
計				1	9		2	5	14	2			33

★★(206)アオバズク *Ninox scutulata* 夏鳥

表 1-5 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：アオバズク

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89								4					4
1990-99						1	2	7			1		11
2000-09					2								2
2010-19					1								1
計					3	1	6	7			1		18

準絶滅危惧種のままだが、生息状況は普・減(準絶滅危惧種 B)から、普通にいるとは言いにいくなっているのので、少ない・普(少なくともほそぼそと生息、つまり準絶滅危惧種 A)と理解するほうがよいと思う。

アオバズクの標識情報は表 1-5 で、巣箱などの営巣場所と思われるヒナへの標識と、渡り途中に捕獲された個体を含む。

★★(208)コミミズク *Asio flammeus* 巨椋干拓地で少数が越冬していたが減少傾向にあるので絶滅危惧種(少・減)だった。近年はさらに少なくなったので絶滅寸前種(極少・減)に。広い農耕地はあっても何らかの質の変化があるのではと思われた。

コミミズクの標識結果は以下である。広大な農耕地にある休耕地をねぐらとして利用しているコミミズクを無双網で捕獲して標識できたと聞いている。採食条件やこのような昼間のねぐらとなる場所がどうなっているのかの把握が課題である。

表 1-6 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：コミミズク

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89	1	1	2	9									13
1990-99		1	1	1									3
2000-09													
2010-19													
計	1	2	3	10									16

★(228)サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* 少なくとも減少傾向にある夏鳥とのことで絶滅危惧種となっていたが、少ないながらよく観察され、特に減少傾向にはないので絶滅危惧種から準絶滅種へとランクダウンした。なお、近年は亜種リュウキュウサンショウクイがエナガなどの群れに混ざっているのが冬期観察され注目されている。高いところを飛ぶので標識されにくい種である。府内の標識数は、50年弱で5羽だった(須川・辻本 2020)。

☆(233)アカモズ *Lanius cristatus* 京都府では迷行種。

アカモズは 2021 年 1 月から国の国内希少野生動植物種に追加された(鳥類はアカモズのみ追加)。京都府では、アカモズは 2000 年以前から迷行種あつかいでその状況に変化はなく、レッドリストには含めない(ランク外)と判断した。

過去の 50 年弱の京都府のアカモズの標識記録は 2010 年～19 年に 1 羽のみだった。(2010～19 年)。一方で、モズの 50 年間弱の記録は 558 羽だった(須川・辻本 2020)。

★★(241)クイタダキ *Regulus regulus* 冬鳥・一部越夏 絶滅危惧種(冬鳥として少・減、少数の越夏に注目)として新規追加された。従来普通にいる冬鳥という認識だったが、越冬数の減少が指摘され、一方で繁殖期に芦生などで確認記録があり少数が繁殖している可能性があるためである。

表 1-7 京都府における 10 年間別・月別の標識情報数：クイタダキ
(須川・辻本(2020)表 7-9).

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79										1			1
1980-89	1		1							7	25	6	40
1990-99	1		5								19	1	26
2000-09		1		1							10		12
2010-19													
計	2	1	6	1						8	54	7	79

府内の標識調査結果は 10 月から翌年の 4 月までの冬鳥型の記録のみで、まだ

繁殖を示唆できる捕獲記録はない。10年間別で見ると、1970-9年が1なのはまだ小鳥類対象の標識調査が少ない時期のためと思われ、その後1980-9:40、1990-9:26、2000-9:12、2010-9:0と近年は激減している。

★★(242)ツリスガラ *Remiz pendulinus* 2015年新規に、冬鳥 準絶滅危惧種(少普)として追加された。観察数がさらに減っており、絶滅危惧種(極少・普)とする。ヨシ原の面積や質的な変化もあるが、本種の全国的な越冬数の減少が背景にあると思う。府内ではヨシ原での継続的調査はあるが標識数は少ない。

表1-8 京都府における10年・月別の標識情報：ツリスガラ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89				1									1
1990-99			2										2
2000-09													
2010-19													
計			2	1									3

★★(255)ヤブサメ *Cettia squameiceps* 夏鳥の準絶滅危惧種(少・減少傾向)。夏鳥の普通種との認識でランク外であったが、確認例(観察例・標識情報)が減少しているのでランクインした。シカ害による下生え激減が影響している可能性がある。

表1-9 京都府における10年・月別の標識情報：ヤブサメ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79				2	6								8
1980-89				1	1				2	2			6
1990-99				17	8	6	4	1	1	2			39
2000-09				23	26	9	10	11	19	12			110
2010-19					9				1				10
計				43	50	15	14	12	23	16			173

標識情報は興味深い。2009年までは繁殖個体群として6月7月に普通に標識情報があったが2010年以降激減し6月7月の情報もなくなった。

★★(268)コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* 旅鳥・一部繁殖 絶滅危惧種(極少繁殖個体群・減少はなし)として新規追加された。旅鳥の普通種というイメージだったが、少数の繁殖の可能性の高い観察記録が宇治川河川敷のヨシ原の調査(日本野鳥の会京都支部による)である。旅鳥としての確認例(観察・標識数)は減少して

いる。

表 1-10 京都府における 10 年・月別の標識情報：コヨシキリ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79					4								4
1980-89					6	2				1	1		10
1990-99						3							3
2000-09					3	1	1	2	7	5	2		21
2010-19					2				1	1			4
計					15	6	1	2	8	7	3		42

標識記録は 2000-9 年代に 6-8 月の記録が少数あったが 2010-9 年はなくなった。

☆(275)キバシリ *Certhia familiaris* 留鳥 準絶滅危惧種(変更なし)。第 1 版では、極めて少ない(減少なし)ということで絶滅危惧種であったが、第 2 版の際に少ない(減少なし)と判断したため準絶滅危惧種とランクダウンしていた種である。状況はそのままなのでランク変更はなかった。

標識記録からみると 2000~09 年代にあった繁殖期とされる 3~6 月の記録が 2010 年以降少なくなっているのが気になる。

表 1-11 京都府における 10 年・月別の標識情報：キバシリ

(須川・辻本(2020)表 7-5).

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89													
1990-99	1	1	1		1								4
2000-09	1	3	3	3	1	1	6	1	2	9	8	1	39
2010-19					4		1			1	1		7
計	2	4	4	3	6	1	7	1	2	10	9	1	50

★★(282)マミジロ *Turdus sibiricus* 旅鳥・一部繁殖

芦生での極少数の繁殖個体群から見て絶滅危惧種(極少・普)としたが、繁殖の兆候がほとんどなくなってしまったとのことなので、絶滅寸前種(繁殖個体群が極少・減)とした。営巣環境の森林の下生えがシカ害でなくなっているためではと思われる。

2010~19 年代の標識記録では 5~7 月がなくなっている。

表 1-12 京都府における 10 年・月別の標識情報：マミジロ
(須川・辻本(2020)表 7-2).

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79					3								3
1980-89					1								1
1990-99					7								7
2000-09					13		3	4	15	4			39
2010-19								1	3				4
計					24		3	5	18	4			54

★★(283)トラツグミ *Turdus dauma* 留鳥 繁殖個体群から見て準絶滅危惧種(普・減)としていたが、近年は観察例が少なく減少しているため、繁殖個体群から見て絶滅危惧種(少ない・減少)とした。

府内の標識記録は、2000～09年代には繁殖期の4～7月にもそれなりにあるが、2010～19年は激減している。これも営巣環境の森林の下生えがシカ害でなくなっているためではと思われる。

表 1-13 京都府における 10 年・月別の標識情報：トラツグミ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89	3	3	2		2								10
1990-99	1		1	1	2					1		1	7
2000-09		2	1	3	3	3	4	3		11	3		33
2010-19					1						1		2
計	4	5	4	4	8	3	4	3		12	4	1	52

☆(285)クロツグミ *Turdus cardis* 夏鳥 少普 準絶滅危惧種(変更なし)

表 1-14 京都府における 10 年・月別の標識情報：クロツグミ
(須川・辻本(2020)表 7-6)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79					13								13
1980-89					3				5	11	2		21
1990-99				24	21			1		15	2		63
2000-09				20	33	9	27	32	338	141	4		604
2010-19				2	21		1	2	75	9			110
計				46	91	9	28	35	418	176	8		811

今回は変更しなかったが 2010～19年代の 6～7月の減少がとても気になる。

★★(292)コマドリ *Erithacus akahige* 旅鳥・一部繁殖 絶滅危惧種(極少・普)と追加。

情報不足種として検討してなかったが、陸鳥で情報不足種はおかしく検討した。

主に奥山を渡りの中継地としている旅鳥(観察記録や、月別標識記録より)。かつて八丁平で繁殖の可能性が高い夏の記録があったが現在はなくなっていて、今後とも注目したい種である。なお、奈良県ではシカ害による尾根筋のササの激減が原因でコマドリ(奈良県の県鳥)が激減したという報告がある。大台ではシカ害によるササ原の分布減少との関係が検討され報告されている。

表 1-15 京都府における 10 年・月別の標識情報：コマドリ

(須川・辻本(2020)表 7-10)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79													
1980-89													
1990-99				3	2					1			6
2000-09				10	8			1		5	5		29
2010-19					2						1		3
計				13	12			1		6	6		38

★★(295)コルリ *Erithacus cyane* 夏鳥。2002 年では絶滅危惧種(極少・普)だったが尾根などに少なくはいるとのことで 2015 年はランクダウンして準絶滅種(少・普)にした。しかし近年はまた減少しているとのこと(10 年別の標識情報も同様の傾向)なので、絶滅危惧種(極少・普)にもどす。減少についてはシカ害による下生への影響があると思われる。

表 1-16 京都府における 10 年・月別の標識情報：コルリ

(須川・辻本(2020)表 7-7)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79				1	41								42
1980-89					5				1				6
1990-99				2	21	2			1				26
2000-09				3	68	6	3	42	3				125
2010-19				4	16			12					32
計				10	151	8	3	54	5				231

☆(306)コサメビタキ *Muscicapa latirostris* 少減の夏鳥として絶滅危惧種(B)である。

表 1-17 京都府における 10 年・月別の標識情報：コサメビタキ

(須川・辻本(2020)表 7-3)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79										1			1
1980-89					2								2
1990-99					7	1			1				9
2000-09				2	23			4	1				30
2010-19				1	4			1					6
計				3	36	1		5	2	1			48

ランク変更はしなかったが標識情報では近年減少傾向があるようで注目が必要な種である。絶滅危惧種Aかもしれない。

★★(354)ホオアカ *Emberiza fucata* 冬鳥・一部繁殖の絶滅危惧種(極少・普)としてデビュー。ホオアカは京都府では河川敷などで少数が越冬していることが標識調査でも明らかになっている。近年保津川河川敷で営巣していると思われる確実な情報があった。詳細の報告は今後だが、冬鳥・一部繁殖との認識で、繁殖数は極めて少ない、変動は減少ではないということで絶滅危惧種(A)と判断した。

表1-18 京都府における10年・月別の標識情報：ホオアカ

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79				2									2
1980-89	1		7	5									13
1990-99	2	2										2	6
2000-09					1					2			3
2010-19										1	2	1	4
計	3	2	7	7	1					3	2	3	28

★★(362)クロジ *Emberiza variabilis* 冬鳥・一部越夏。繁殖個体群から見て絶滅危惧種(極少・普)としていたが、近年は繁殖期の観察例が激減している(標識情報でも6~7月ほとんどなくなる)ため、絶滅寸前種(極少・減)とする。シカ害による下生えへの影響が強く疑われる。

表1-19 京都府における10年・月別の標識情報：クロジ

(須川・辻本(2020)表7-4)

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79					2					1			3
1980-89	11	3	3	4	3					11	61	16	112
1990-99	3		1	9	10					29	186	12	250
2000-09	20	5	31	27	16	10	21	2	2	115	722	58	1029
2010-19		1		2	6		1	1	2	11	148		172
計	34	9	35	42	37	10	22	3	4	167	1117	86	1566

標識情報を活用する上での課題

ここまで各種の10年間別・月別の標識情報数をご覧になった方は、レッドデータブックの希少性の検討に標識情報を活用する上での最も大きい課題は、時期別の調査努力量に関する情報が必要だということに気がつくられると思う。

10年間単位でみると、1970~09年代が少ないのは、バンダーの数が少なかったからである。山階鳥研として冠島のオオミズナギドリの標識には力をいれていたのを除くと、バンダーの数がまだ少なかった時代である。講習会発足もあり

1980年代以降は小鳥類の標識数も増えた。標高の高い奥山でも継続的な調査がされるようになった。

もっとも、2000～09年に比べて、2010～19年に減少する傾向のある種が目立つのは、個体数の減少を反映しているのか、あるいは調査努力量の変化なのかが、とても気になる。

理想的には、年別・月別に調査努力量が判ればと思う。例えば12mの網数と開いている時間数を単位とするような形である。テープを流して誘引している場合は、何らかの係数で増やすとかである。

継続的な調査をしていた人は限られているので、それらの方について、構想編(須川・辻本 2020a)で述べたように、鳥類標識調査地目録(詳細は須川 2018a : 須川 2018b)ができれば、調査努力量についてはかなりのイメージが得られると思う。今回の作業を通して、かつて熱心に標識していた方と連絡が取れた場合もある。今後京都府内の標識調査地目録作成を充実させたい。

現在では希少性が高く標識調査の対象となりにくい種が、かつては標識調査ができたという情報が残っているのも貴重だと思った。当時はこういった状況で標識可能だったのか、調査地の様子を調査者からうかがうことも大切である。当時はあたりまえのようにできた標識調査が、状況がかわってできなくなっている。その中には調査地の環境の変化もあるかもしれない。環境に変化がないとすれば、もっと広域的な個体群の動向を反映しているのかもしれない。

注目できる環境での継続的調査

鳥類標識調査では、調査努力量は気になるとはいえ、そもそも希少性の高いレッドデータ種の中で、そこそこデータが得られている種がけっこういるのも驚きである。効果的に標識調査をする上では、質的に良い環境を選択して調査をする。よい結果が得られる場所だとモチベーションも高まり、継続的な調査も続く。

景観的な視点から多くの標識鳥が得られた調査地を見ると京都府の中でも自然度の高い奥山にある森林や安定した里山環境、自然度の高い河川敷、半島の先端、離島、あるいは結構多様な環境を含む広大な農耕地などでの調査継続がある。中断があるとしても、同じような努力量の調査が、別の調査者であれ再開されると、その変化を追うことができるだろう。

現時点でのまとめ

第3版の改訂作業を通して、特にランクアップした種を通して京都府の鳥類相の変化から環境等の課題をまとめると以下のように考えられた。

- 1)シカ害による下草の減少が原因と思われる種のランクアップが目立った：コマドリ、マミジロ、コルリ、クロジなどの営巣減少。
- 2)中州の変化が原因と思われるランクアップ種がある；コアジサシ、シロチドリなどの営巣減少。
- 3)ヨシ原の変化が原因と思われるランクアップ種：ヨシゴイ、チュウヒ、ツリスガラ
- 4)農耕地の変化が原因と思われるランクアップ種：コミミズク、アマサギ。
- 5)営巣開始が注目される種がある：コヨシキリ、ホオアカ、ククイタダキ。

ランク外からの追加7種



シロエリオオハム



アマサギ



ククイタダキ



ヤブサメ



コヨシキリ



コマドリ



ホオアカ

画像の提供(河合恵美子氏より)

写真1 第3版レッドリストに追加された7種(画像の提供河合恵美子さん)

(注:本報告で言及していないシロエリオオハムは準絶滅危惧種の冬鳥として追加された)

これらの種の中では、上記に示したようなさまざまな理由で、ランク外からあらたにレッドデータブックに追加されデビューする7種への注目が高いと思う。

京都府第2版レッドデータブックのウェブ版では掲載108種の各種説明にいずれも写真を掲載している。第3版のレッドデータブックに向けてもこれらデビューした7種の画像ファイルを協力者からいただいているので写真1に紹介する。

鳥類標識調査の情報は、野鳥観察者からの情報と組み合わせて京都府の希少性の高い種の検討に多くの役割を果たしていることが示せたと思う。

大きな課題と思うのは、京都府以外の都道府県でも同様の作業ができるのに、ほとんど標識情報が俯瞰され活用されていないという点である。

日本各地には過剰な開発問題が続き、希少性の高い種の実態把握が課題となっている。マスコミの話題となりやすい種のみ限定した検討はされることはあっても小鳥類を軸にしたデータの可視化がなされないと、問題意識すら発生しないことになる。

文 献

江崎保男・和田岳編(山岸哲監修)(2002)近畿地区 鳥類レッドデータブック. 京都大学学術出版会.

京都府(2002)京都府レッドデータブック.

京都府(2015)京都府レッドデータブック 2015(第2版). 京都府.
<https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/index.html>

須川恒(2018a)関西における鳥類標識調査地目録の作成. Alula No.56(2018 春号):28-38.

須川恒(2018b)関西における鳥類標識調査地目録作成の試み. Alula No.57(2018 秋号):29-55.

須川恒(2020)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その1 前史編. Alula No.60(2020 春): 45-55.

須川恒・辻本大地(2020a)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その2 構想編. Alula No.60(2020 春): 56-67.

須川恒・辻本大地(2020b)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その3 中間報告1. Alula No.61(2020 秋): 18-35.

辻本大地・須川恒(2020) データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その4 中間報告2 調査地の概要紹介と、集計・分析についての重要性の考察. Alula No.61(2020 秋): 36-43.